



写真=平出和也、中島健郎 文=麻生弘毅

山頂へ向けて登る。背後にはディラン (7,266m) をはじめ、カラコルムの山々が迫る

石井スポーツ所属アスリート 平出和也×中島健郎 インタビュー

## 最強タッグの本音に迫る ピオレドールの先に見据えるもの

2017年のシスパーレ北東壁初登攀によりピオレドール賞  
に輝いた平出和也と中島健郎。ふたりは昨年の  
ラカポシ南壁初登攀により、コンビとして2度目のピオレドールに。  
そんなふたりが目指す、次なる頂とは……!?

KENRO NAKAJIMA



「登山とはなにか。  
その答えがわからない  
からこそ、  
登り続けているのだ  
と思います」

KAZUYA HIRAIDE



「ラカポシ山頂から  
シスパーレ、そしてK2が  
見えたとき、  
ぼくの第二の登山人生  
が始まったんです」



1



2



3



4



5

1 C1~C2間の不安定なセラックの合間を抜けて、急雪壁を登る。2 C3にて晴れ間を待ち、3泊停滞。会話は日本に帰ったらまっさきに食べたい料理……ぐらいなもの。3 C1までの、迷路のようなアイスフォール帯。4 C2~C3間の氷壁を登る。5 アタック日の朝。絶好の好天がやってきた

「メールが一本届いただけなので、まだ実感はないんですよ」

風雪に磨かれたような鋭い表情をわずかに崩し、平出和也は小さく笑う。その言葉に頷き、パートナーの中島健郎が続けた。

「ただ、賞を通してこういう登山、登り方があることが伝わったら、と思っています」

やわらかい表情と前腕の異様に盛りあがる筋肉……相反する印象が違和感なく同居するところに凄みを覚える。2020年9月19日、ふたりは前年に行なったラカポシ(7,788m)南壁初登攀で、クライミング界のアカデミー賞と呼ばれる「ピオレドール賞」に輝いた。平出は3回目、中島は2回目の受賞。現在、日本人でこの賞を複数回受賞しているのは彼らだけ。前回の受賞は2018年、ふたりで行ったシスパーレ北東壁初登攀によるものだ。

「1度目の受賞では“自分たちで勝ち得た”と思っていました。2度目は15年間挑み続けた精神、情熱のあり方を認められたのかな、と」

受賞をきっかけに多くに人の目に触れる機会が増え、自分たちの登山にエネルギーを感じてくれる人が多い、ということを実感しているという。

「だからこそ今回の賞は、ぼくと健郎だけのものじゃなく、受賞を喜んでくださるみなさんの代表として、という気持ちです」

「ただですわね……中島がいたずらっぽく笑う。」

「元々は、ティリチミール(7,708m)という山の未踏壁を狙っていたんです。だから少し、ラカポシに申し訳ないな、って……」

さらに、今回の山行は、次なる目標を達成するためのトレーニングでもあった。平出がまっすぐにこちらを見つめながら言う。

「ラカポシ山頂からシスパーレが、そして100km先のK2が見えたとき、ぼくの第二の登山人生が始まったと思ったんです」

\*

ふたりでの初登山は2014年、テレビの仕事で訪れたミャンマーのカカボラジ(5,881m)だという。

「そのとき、なにか一緒に楽しいことができそうだと感じたんです」

平出は、盟友でありともにカメット(7,756m)を登った谷口けいさんから、中島のことをよく聞いていた。

「当時の印象は、本人や仲間がよく怪我をする“危険な男”です」

本人の怪我は不注意であり、仲間の怪我也グループの力量や雰囲気を表すものだと、笑いながらも眉をひそめる。

「それでも健郎と登ろうと思ったのは、けいさんが亡くなったから。これ以上、山の仲間が亡くなる姿

を見たくないの……」

平出と谷口さんは長くロープを結び合っていた。ふたりは、ゴールデン・ピーク、ライラ・ピーク、ムスターグ・アタ、シブリン、カメット、ガウリシャンカール、ナムナニ、シスパーレなどの難壁に挑み、カメット南東壁の初登攀ではピオレドール賞に輝いている。その後の2015年、谷口さんは大雪山系の黒岳で遭難——。

「いかに生きて還ってくるかを繰り返すことで得られる術——イケイケの健郎からすると、臆病に見えるかもしれないけれど……」

そう言って平出は笑みを見せる。中島のがむしゃらな姿は、10年ほど前の自身にも重なった。だからこそ、手を貸したい。

「そんな山との向き合い方は、ぼくが経験から学んだ生き抜く技術。それを学んでほしいと思い、彼を山に誘ったんです」

そうして2017年、シスパーレ北東壁の初登攀を果たす。平出にとっては初挑戦から15年をかけた、4度目の挑戦であり、ともに頂を目指した谷口さんの思いを背負っていた。

「いろいろなことがあり、山を辞めようとしたこともあるなかで、何度もシスパーレに還っていった。彼の山はさまざまなことを教えてくれる物差しのような存在でした。今後、こんな山に出会うことができるのか……」

矢継ぎ早に次を考えるのではなく、頭を一度、真っ白にしたかった。そうして静かに我が身を振りかえる。心に思い浮かぶのは、山と対峙し、右往左往しては悩み、そうして壁を越えてゆく——そんな時間が愛おしかった。

「そうして、喉から手が出るほど登りたい山……そう考えて浮かんだのが、K2西壁です」

K2への挑戦にあたり、ふたりは7,000m後半から8,000m峰への



C2出発の朝。奥に山頂が見えるが、まだまだ遠い



快晴の山頂。シスパーレ、そして次の目標となるK2が遠望できた



ひらいでかずや  
**平出和也**

1979年、長野県生まれ。中島によると「山を見る洞察力とセンス、体力とスピードに優れる。その安心感があるからこそ、ぼくは心おきなく突っこんでいくことができます」

なかじまけんろう  
**中島健郎**

1984年、奈良県生まれ。平出によると「ぼくが失いつつある体力や技術を持っており、ふたりの力を合わせることで登山が広がる。ラカポシでは山頂までドローンを担いでくれました(笑)」

予備山行を2度行うことに決めた。そのひとつがティリチミールであったが、登山許可が下りずにラカポシに。そして、この夏、次なる予備山行を企画するものの、周知の状況でヒマラヤ行きを断念している。もう一度、トレーニング山行ができれば、K2は見えて来るが、先の見通しは立っていない。

「それでも、外的な状況の変化に一喜一憂することはありません」

平出はきっぱりと言う。登山は生活の一部であり、家族と過ごすこと、こうして登山を語ること、日々トレーニングすることもすべて生活の一部であり、K2へとつながる日々の取り組みだと信じているから——そう語る姿に迷いはうかがえない。

「すべては生きているからこそできること。亡くなった仲間の思いを背負っているので、気持ちを切ったりしている場合じゃない。20年かかったっていい、K2西壁とはそのくらいの存在だと思っています」

K2西壁は、ここ数十年は挑戦さえされていない、世界に残された最難課題のひとつだという。それまでにここにことしていた中島だったが、話題がK2におよぶと、目の色を変えた。

「8,000m後半の無酸素は経験がないけれど、偵察で見たところ、まったく手が届かないわけではなく、やりようによってはと……いう可能性がうかがえた。だからこそ、行きたいんです！」

それでは中島にとって登山とはなにか。そんな質問に、後日、メールで返信をくれた。

——自分にとって登山がなんなのかは、よくわかりません。しかし、わからない魅力があるからこそ、登り続けているのだと思います。森を歩くだけでも楽しいですが、ぎりぎりのラインに突っこんでいるときの生きているという感覚も、すばらしいものです——。